

「生命科学コース（仮称）」設置に向けての教員対象アンケート

秋 山 繁 治

Questionnaire survey for teachers toward the establishment of “Life Science Course”

Shigeharu AKIYAMA

Ten years have passed since the project meeting for educational reform (1995-1997), and in light of the increasing number of female students going on to science fields, the introduction of a “new course to support science advancement” was discussed at our school in 2006. The decision was made to apply to the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology for designation as a Super Science High School (SSH), and in the same year as we received our designation the Life Science Course was born.

This paper reports on the questionnaire survey conducted before the “Life Science Course” was set up. Regarding the questionnaire, we asked about curriculum, entrance examinations, public relations, admission guidance, implementation time, and future direction. There was a strong hope that the course would meet the needs of students interested in science, and teachers, nearly 80% of whom agreed with the establishment of the Life Science course, were forthcoming with advice on how to implement a unique and attractive educational program.

<キーワード> 教育改革, 生命科学コース, 理系進学支援, 科学教育, 教員対象アンケート

はじめに

1995年7月から1997年8月、本校では、「清心中学校・清心女子高等学校の展望」を考える教育改革のプロジェクトを実施した。教員、保護者、生徒にアンケートを実施し、その結果を踏まえて、将来の方向性について提言するというものだった。アンケートは計6回（教員対象4回、生徒対象4回、保護者対象2回）を実施し、それをもとにした審議の最終報告は、教員研修会（1996年8月30日と1997年8月29日）で行われた¹⁾。

本校の教育改革として、1998年度にコンピュータ室が整備され、本校独自の学校設定科目として、高等学校1年生でパソコンを使った「国際情報」（1単位）²⁾が、1999年度から教科の枠を超えた授業も可能な「発展科目」（「生命」³⁾・「女性史」などの科目から選択履修）が誕生した。研修旅行の行先も沖縄に変更され、歴史文化・戦争平和・自然環境の3コースから生徒自らが選んで参加できる形になった。

文部科学省は、1998、1999年に新学習指導要領を改訂し、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成が基本的なねらいとなり、2002年から「ゆとり教育」

として、完全週5日制、総合的な学習の時間の新設、授業内容の3割削減がおこなわれた。本校は、それに先立って本校独自の教育改革を実施していたことになる。

10年が経過し、「ゆとり教育」が終焉をむかえ、女子生徒の理系分野への進学者が増えている状況を踏まえて、次に「理系進学を支援する新しいコース（生命科学コース）」を設定することを2004年に学内で提案し、2005年度に一部の教育内容を試行的に実施し、2006年度の文部科学省スーパーサイエンス事業に申請し、女子の理系進学支援を掲げた「生命科学コース」⁴⁾⁵⁾が誕生した。本報告は、「生命科学コース」開設前の2005年度に実施したアンケート調査について報告する。

アンケートの実施

「理系進学を支援する新しいコース」を設置について、意見があった。

- ・本校へ入学する理由となりえる。
- ・理系進路への進学者が増えている状況に対応できるカリキュラムをつくる。
- ・すでに設置されている公立校の理数科の中に埋も

れない特徴をだす。

- ・ どのような生徒を集めるかという方向性を明確にする。
- ・ 社会に対して新しい教育を提供するというメッセージ性を持たせる。
- ・ コストパフォーマンスを考慮する。

これらを考慮して、「生命科学コース」を提案し、その設置についての基本的な課題を洗い出すために、①教育課程、②広報・入試、③進学指導、④教育プログラムの導入、⑤今後の方向について教員にアンケートを実施した。

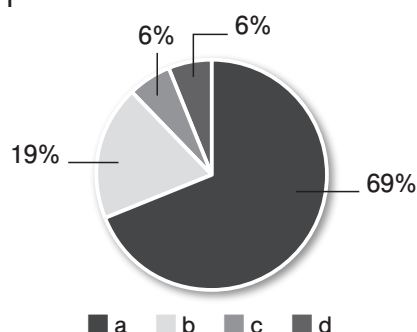
アンケートの結果

①教育課程

問1 1年次から「生命科学コース」のカリキュラムを別に設定することについてどのように考えているか。

- a. 前向きに検討することに賛成である。
- b. 1年次はコースに分けず、2年次から「理系」と「生命科学コース」を設定すればよい。
- c. 「生命科学コース」を設定する必要はない。現行カリキュラムのままでよい。
- d. 判断できない。

問1



（記述）

- ・ 入学時点では一括して募集しておき、コースに分かれるのは2年次にしてはどうか。

問2 1年次より別コースとして「生命科学コース」を設置する場合、特色となる魅力は何か。

（記述）

- ・ 学力の高い生徒の集団ができれば、授業のレベルをあげることができる。
- ・ 生き残りをかけた攻めの姿勢をアピールできる。
- ・ 1年次から目的により特化したコース設定することが、生徒募集での大きなインパクトになる。

- ・ 3年かけて、じっくりテーマに取り組むことができる。
- ・ はじめて目にしたので実感が湧かないが、あえて言えば明確な目的意識を持った生徒が入学すると考えられるので、学力を伸ばすことができる。
- ・ 学校の特徴を見えやすくするという利点がある。そのため、カリキュラムで、高1の他コースとの違いをはっきりさせる必要がある。
- ・ 公立校では、理数系コース設定の際、特色づくりの一環として、理数系・生命科学系・情報系などのコースを設定している。アピールする意味で始めた方がいい。
- ・ 専門性の高い先生が学校の魅力づくりに貢献できる。
- ・ 早期から進路指導を長いスパンで指導できる。
- ・ 清心中生の外部進学を防ぐことができる。
- ・ 時代のニーズに合っている。
- ・ 医歯薬系の進路保障を宣伝することにより、受験生の増加が期待できる。
- ・ 同じ目的意識を持った生徒に、効果的な進路指導ができる。
- ・ 今の時代のニーズに応えるコースで、生徒募集面でのメリットがある。
- ・ 別コースにすることで、今まで理系で進学実績をあげてきた事がより明確に外に向けてアピールすることができる。
- ・ 別コースにすると、生徒がプライド意識をもって頑張ることができる。
- ・ 清心中学の上位層がより多く残ってくれる可能性がある。
- ・ 30名程度の精鋭集団をつくることで、学力面の成果が期待できる。
- ・ 国際コースより、ねらい・コンセプトはしっかりしている。
- ・ 今の生徒のニーズに合致している。
- ・ 宗教とリンクさせていける魅力があるし、学習内容・進路実態も明示できる。
- ・ 今までの本校の特色ある活動（発展科目・研修旅行）を引き継ぐ形で良い。

問3 1年次より別コースで「生命科学コース」を設定した場合、どのような問題があるか。

（記述）

- ・ 当初は人が集まるとは考えず、覚悟を決めた上で長期的視点のもとに実行する必要。
- ・ コース変更の扱い。

- ・カリキュラム上、明確な理系との差が必要である。
- ・生命科学コース以外の（普通コース）理系の生徒の扱い（少人数授業や合併授業の実施の是非）を考える必要がある。
- ・カリキュラムの簡潔さ（わかりやすさ）を目指す必要がある。
- ・1年次のカリキュラムの差がほとんど見えない場合、別コースにする必要性が薄れる。
- ・受験時にそこまで（医歯薬系を希望するかどうか）考えて、意識をもって選んでくれるかどうか心配である。
- ・コース設定の目的など、1年次に生徒に十分理解させてから選択させる方がよい。
- ・1年次から別コースにした場合、高1は外部中との融合がよく問題になるが、その点は大丈夫か。
- ・生命科学コースではない生徒が、そのような進路に進みたくなった時、生命科学コースではないから無理と思ってしまったら可哀そうである。
- ・担任は持ち上がるだろうか。生徒は変化の中で成長していくのだが、一長一短があり。また、行事などでの問題点はないか。
- ・理系と一線を画することはカリキュラム構成上難しいのではないか。理系の中にも医・薬志望者が出てくる可能性あり。また、生命科学コースに文系の生徒もいるとなると、進路を考える上で支障はないか。コースの内容の幅が広すぎて進路を選ぶときに曖昧なまま受験することになる。
- ・理系コースで、生命倫理面を教えていく（社会の要請に応じて）というのでは足りないのだろうか。
- ・学校組織（例えば少人数クラスが1クラスできるなど）が複雑になる。同時にカリキュラムも複雑になる。
- ・宣伝だけで、入学後に生徒の学力を伸ばすことができなければ意味がない。
- ・生徒は、生命科学コースを特進コースととらえるだろう。その時に、理系コースの意義をどう伝え、理系コースの生徒たちのモチベーションをどう保つのかを考える必要がある。
- ・「生命科学コース」と比較して、「普通コース」の生徒たちの指導を充実させる必要がある。
- ・公立の滑り止めという現実で考えると、200名の女子生徒対象で厳しい。公立の上に立つ戦略が必要である。
- ・普通科と区別し、体験学習・実験実習などふんだんに導入し、センター入試でなく、推薦・AO入

試に照準を定めて「生命科学科」として設置する必要がある。

- ・活発でユニークな活動を展開していくための自由度を予算の上でも、活動の上でも認めて援助していく心構えが、管理職にも職員全体にも不可欠である。

問4 1年次より別コースで「生命科学コース」を設定した場合、現行の2年次理系と3年次理Ⅰ・理Ⅱコースのカリキュラムをどのようにすればよいか。

※理Ⅰは農学・薬学系、理Ⅱは理工・医歯学系の進路希望者に設定していた。

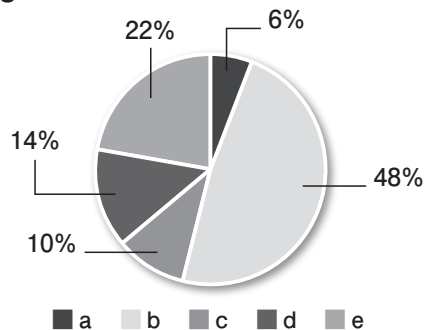
（記述）

- ・特色を出し、生徒の選択幅を持たせつつ、コースは簡潔に分かりやすくしていく方向性をよく考えて検討すべきである。
- ・各コースの進路保障がされていることが重要である。
- ・カリキュラムが非常に細分化され、現在の理系コースが曖昧になる。
- ・理Ⅰの設置は難しい。
- ・理Ⅰが減ることを覚悟し、3年次の理系のクラス分けは無理と考えられる。

問5 生命科学コース入学後、希望があれば普通コースへの変更を認めるか。

- 1年次から2年次への進級時に、2年理系への変更は認める。
- 1年次から2年次への進級時に、2年文系・理系への変更を認める。
- 1年次から2年次への進級時及び2年次から3年次への進級時に、2年理系及び3年理系への変更を認める
- 認めない。
- 判断できない。

問5



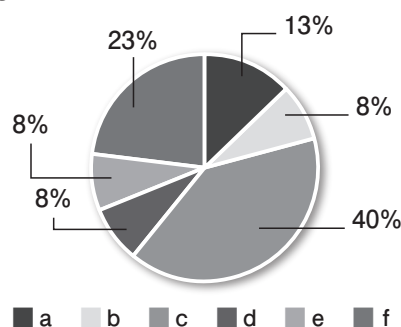
（記述）

- ・コース変更については、柔軟に考えていく必要がある。現段階で選択肢を設定して決を採るのは性急である。
- ・選択肢として、「1年次から2年次への進級時に、2年文系・理系への変更を認め、2年次から3年次への進級時でも理系への変更を認める」または、「各進級時に、自由に変更を認める」というものも考えられる。

問6 普通コース入学後、生命科学コースへの変更を認めるのか。

- 希望があれば、1年次から2年次への進級時に認める。
- 希望があれば、1年次から2年次への進級時、及び2年次理系から3年次への進級時に認める。
- 条件・基準（成績等）を設け、クリアすれば、1年次から2年次への進級時に認める。
- 条件・基準（成績等）を設け、クリアすれば、1年次から2年次への進級時、及び2年次理系から3年次への進級時に認める。
- 認めない。
- 判断できない。

問6



（記述）

- ・何らかの基準を設定するにしても、可能性を残す方向で考える必要がある。現段階で選択肢を設定して変更を認めないのは性急ではないか。

問7 教育課程についての意見

（記述）

- ・1年次に生命科学コースとしての特徴的なカリキュラムがなければ、2年次も継続するかどうかを考える手がかりがないのではないかと。授業の担当者の裁量によるとすれば、その授業をうけたり、担当している人にしか差がわからない。

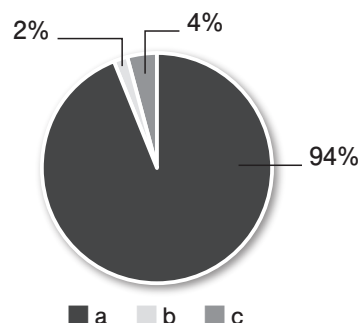
- ・安易にコース変更は認めない方がよいが、将来の進路希望にかかわるので、全くダメというのは難しい。
- ・「生命」必修になると、発展科目の選択の機会がなくなる。（たたき台の案で「生命」必修となっている）。
- ・補習や土曜日セミナーでカリキュラム上の特色をだせる可能性もある。
- ・高2「情報」を数学に読み替えた方がよい。
- ・「生命」の選択教科を2年次より大幅に増やし、個々の生徒の興味に対応する。
- ・3年次のリーディングは英語論文講読に振り替え、理科の教員とのT・Tとする。
- ・保体、家庭の教科も必要ではないか。
- ・他教科との連携（学期によって他教科、例えば保健などの教員がテーマを決めて授業を分担）する。

②入試・広報

問8 生命科学コースの定員は30名にする。

- 適当である。
- より少ない方がよい。
- より多い方がよい。

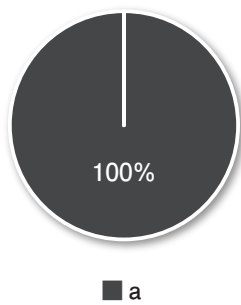
問8



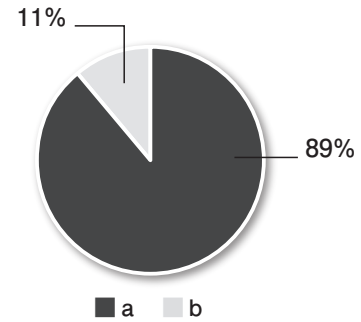
問9 生命科学コースの定員における、清心中学校出身者とその他の中学校出身者の比率をどうするか。

- 1 : 1 がよい。
- 2 : 1 がよい。
- 1 : 2 がよい。
- 清心中からの希望者数に応じて、比率は柔軟に対応すればよい。

問9



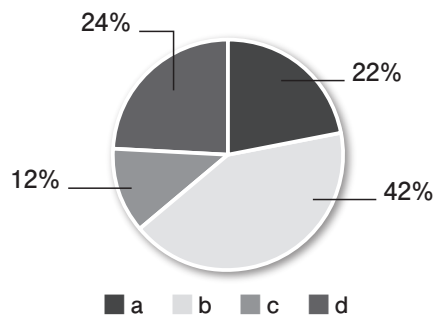
問11



問10 生命科学コースの定員確保の見通しはどのように考えているか。

- a. 清心中学校からの志願者・他中学校からの志願者ともに定員を超える応募が期待でき、定員確保は可能である。
- b. 清心中学校からの志願者はある程度期待できるが、他中学校からの志願者はそれほど期待できず、場合によっては定員が確保できないこともありうる。
- c. 清心中学校からの志願者・他中学校からの志願者ともに、それ程期待できず、定員確保は困難が予想される。
- d. 判断できない。

問10



（記述）最初は人数が少なくとも、徐々に増やしていくつもりで進めるべきである。

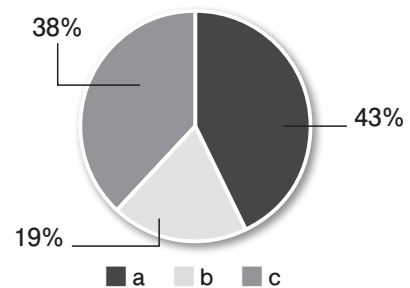
問11 生命科学コースの設置は、学校全体の魅力づくりにつながるか。

- a. 思う。
- b. 思わない。

問12 清心中学校からの生命科学コースへの入学の判断をどのようにするか。

- a. 生命科学コースを希望する者は、原則として認める。
- b. 生命科学コースを希望する者は、校内成績の基準を設けて選考する。
- c. 高校入試を受験させ、生命科学コース希望者の合否を判定する。

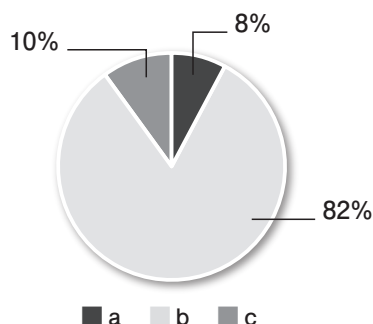
問12



問13 高校入試における合否の判定をどのように決めるか。

- a. 普通コース・生命科学コースともに同一問題の入試で、別々に選考し合否を決定する。
- b. 普通コース・生命科学コースともに同一問題の入試で、合わせて選考し、生命科学コースには不合格だが、普通コースには合格という場合も認める。
- c. 普通コース・生命科学コース、別々の問題で入試を行い、合否を決定する。

問13



（記述）

- ・普通コース、生命科学コースは同一問題でよいが、理科のみ口頭試問をする。

問14 入試・広報についての意見

（記述）

- ・推薦入試を設定する。
- ・生命科学コースという名称が実際にどのようなことを学び、どのような進路の可能性があるのかが漠然としていて、特に一般の人には理解しにくいのではないと思われる。思い切って、もう少し分かりやすい名前にしてはどうか（といって、医歯薬コースとかは少しやりすぎかとも思うが…）。
- ・一般の理系との線引きが難しいと思う。
- ・外部に積極的にアピールすることも必要ですが、まずは内部からの生徒を大切にすることから始めたほうがよいのではないかと。たとえば外部からあまり来なくても、内部から生命科学コースに進んだ生徒が満足すれば、そのうち結果もついてくると思う。
- ・本来ならば他校に進学していく生徒に医歯薬系への進路保障をアピールする。
- ・発展科目「生命」や研修旅行の実施内容で魅力をアピールする。
- ・生命科学コース用にパンフレットを作成する。
- ・岡山・倉敷の学校については、管理職が直接学校訪問すれば効果的である。
- ・生命科学コースの塾対象の説明会を実施する。
- ・開設を平成18年（現在の中2）に設定し、それまで極秘にしておいて、他校を出し抜く宣伝をする。
- ・「生命科学コース」の広告を、新聞に一面広告に出す。
- ・広報用に開設のタイミングでポスター、パンフレットを作成して情報発信する。
- ・実習、研修、大学との交流などの写真を盛り込む。

- ・進学大学、就職実態を追跡調査し、外部に明示する。
- ・企画をTV・ラジオなどに情報提供し、メディアを使ってアピールする。
- ・生命科学コースに限らず、いろいろな試みについて1、2年ですぐに見切りをつけすぎではないか。そして、失敗したとみなされた場合、企画をしたメンバーに責任を押しつける傾向がある。ある試みをはじめたからには、少なくとも3～4年は続けるべきで、結果が出て、さらにその生徒が卒業して評判が広まるには時間がかかる。これでいこうと決めたなら、少し辛抱して続ける必要があるのではないか。
- ・理系の女子校としてのアピールができる。
- ・学校の意欲を示すことができる。
- ・他校の理数科との違いの説明が難しい。

③進路指導

問15 生命科学コースの進学実績をあげるために必要なこと、克服すべき課題にはどのようなことが考えられるか。

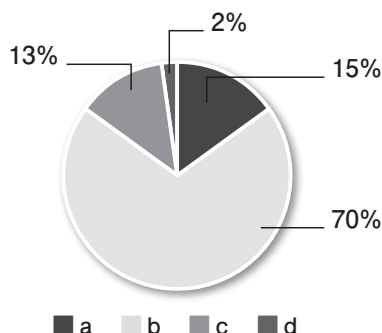
（記述）

- ・勉強しようとする環境や雰囲気をつくる必要があると思う。
- ・クラス（コース）の雰囲気が大切だと思う。今の理系コースには、その雰囲気が足りない。
- ・進学実績を出すには、それなりのレベルの集団でないと期待はできないので、どのような生徒を集められるかに依存する。
- ・コースの主旨、方向性を明確にするところから始めなければならない。
- ・補習授業、土曜日セミナーの見直しをする。
- ・英検、数検などの目に見える資格を多く取得させる。
- ・2年次で各自、研究テーマを決めて課題研究を通年で設定する。成果の研究発表会を全職員で援助し、中学生・一般を呼んで理系の進路学習の機会として利用する。

問16 医歯薬系学部の指定校推薦の対象をどうするか。

- 生命科学コースのみを対象とする。
- 生命科学コース・普通コース理系ともに対象とする。
- その他

問16



（記述）

- ・指定校推薦を増やしていくことは大変重要で、保護者から見ても意味は大きい。
- ・aに賛成理由…しんどいけど、このコースで頑張れば医歯薬に行けると中学生にも思わせたい。
- ・その他として、生命科学コースを優先させるが、希望者が無い場合には普通コース理系にまわす。

問17 進路指導についての意見

（記述）

- ・生命科学コースに限らず、自分の意志で、自分の力を把握し、納得して進路を選択していかなければならないと思う。教員は、学校の評判や進学実績にばかり目を向けず、今、自分の目の前にいる生徒に目を向け、彼女たちが、本人にとって最良の進路を選択できるよう、励まし元気づけ、助言していくのが大切だと思う。成績面からだけ見れば、ピンからキリまでいる生徒たちを、いかにやる気にさせるかが、教員の腕の見せ所だと思う。甘やかすのではなく厳しく指導する中で、「大切にされた」という思いが卒業生の心に残るような学校でなければならないと思う。どんなに新しいコースをつくっても、入ってきた生徒を簡単に切り捨てるような学校にしてはならない。
- ・蒜山合宿などで、生命科学コースは別プログラムを組む必要がある。
- ・センター入試を第一義にしない。そうしないと他の公立との区別はつかないし、結局、後追い、滑り止めに墮し、生命科学コースの設置自体が失敗する。

④教育プログラムの導入

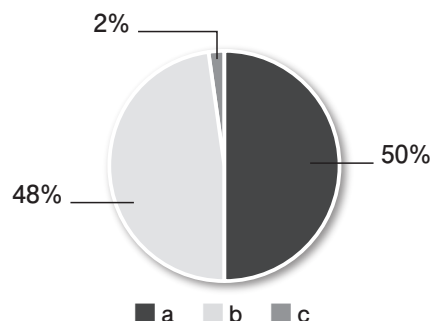
問18 205年度入学生のカリキュラムをどうするか。

- a. 現行のカリキュラムとする。
- b. 1年次は現行のまま、2年次から理系に普通

コース理系と生命科学コースを設定し、理系希望者はどちらかを選択することとする。ただし、その場合のカリキュラムは、2005年度生のための移行措置カリキュラムとする。

c. 判断できない。

問18



問19 205年度入学生に対して移行措置をとる場合の問題点としては、どのようなことが考えられるか。また、利点としてはどのようなことが考えられるか。

（問題点）

- ・入学生の影響が多である（ある程度の人数がいないと実績作りが困難になる）。
- ・1年次から2年次へ進級する際の進路選択の基準（希望か成績か）を明らかにしておかなければ、保護者も生徒も不安になる。
- ・広報が追いつかない。
- ・希望で選ぶので、必ずしも学力の高い生徒を確保できない。
- ・準備期間が足りない。早すぎる。
- ・プランが中途半端になり、生徒も学年団も対応が大変になる。活動内容が準備不足になる可能性が高い。

（利点）

- ・前倒しでやってみることができ、今までの大学入試合否結果を効果的に広報に使うことができる。
- ・他校に先駆けて実施することが肝要である（先を越されれば二番煎じとなり、話題性がなくなる）。
- ・本格実施の前に実績を作り、話題性を高くすることができる可能性がある。
- ・勢いに乗って、実行し、実績を上げられる可能性がある。

問20 教育プログラムの導入についての意見

（記述）

- ・できる限り今いる生徒を大切にしたいので、

よいとおこなうプロジェクトなら2005年度入学生にもコース選択をさせてあげたい。

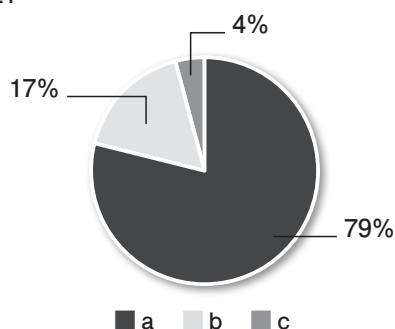
- ・2005年度生から始めることによって、もう1年、高1をどうするかを考えることができ、コース人数の調整を面談等の指導で調整することができる。
- ・2006年度については、合格者の中より希望者を募る。
- ・短期間に目新しいことを次々とおこなうことで、保護者・生徒に学校の方向性が分かりにくくなる恐れがある。
- ・2007年度の広報活動に使えるように、急いで内容を決定していく必要がある。

⑤今後の方向

問21 生命科学コースの設置について、どのように考えているか。

- 設置の方向で前向きに検討することに賛成である。
- 慎重に検討し、問題点が多い場合は、設置は見送る方がよい。
- 必要性は認められないので、検討を始めることには反対である。

問21



問22 生命科学コースについて、今後の問題点として、どのようなことが考えられるか。

（記述）

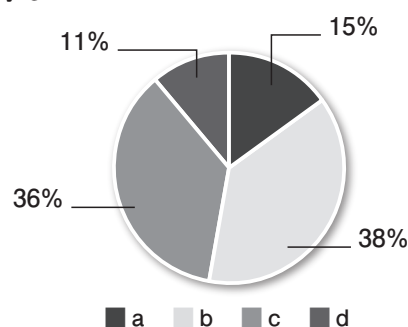
- ・広報活動など、2005年度からできることを早急にやっていく。
- ・定員に達しなくとも辛抱する心構えが学校にあるかどうか。
- ・全教職員の協力を得られるかどうか。
- ・コースの教員の考えを学校が配慮できるか。
- ・1年次から別のコースをつくって、普通コースとうまくとけあうことができるか。
- ・本校の中で生命科学を希望している生徒は多いが、今のスタッフで対応できるのか。
- ・設備的な面は大丈夫なのか。

- ・国際コースが中学にできた場合、国際コースが高校にはなくて、他のコースがある。それでいいのか。統一性はどうか。
- ・コースの設定目的、内容を明確にする必要がある。
- ・実験、実習に関するハード面での充実が必要である。（場所・器具・実験・助手等）。
- ・教員の研修の機会を増やす必要がある。
- ・現高1で清心中以外から入学した生徒は、英語や清心女子大への進学に魅力を感じて入学した者が多い。理系進学を目指して受験する生徒が集まるのか疑問がある。
- ・コースごとの評価（成績処理）の仕方を考える必要がある。
- ・生物担当のスタッフが不足していて、しかも助手もいない状況では難しい。

問23 文系のカリキュラムをどのようにするか。

- 現行のままでよい。
- 特色をつくる必要があると思うが、生命科学コースが軌道に乗ったあと、次の段階として検討すればよい。
- 生命科学コースの設置に合わせて、文系のカリキュラムにも何らかの特色を打ち出せるものを検討すべきである。
- 判断できない。

問23



（記述）

- ・英語教育がもはや特色とは言えなくなっているのので、現行のままでよいとは考えられない。

問24 文系のカリキュラムの特色づくりとして、どのようなことが考えられますか。

※文Ⅰは私立文系、文Ⅱは国立文系の進路希望者に設定していた。

- ・別コースの設定を設定する。
- ・文系に限らず、校外への広報活動をする上で、ク

ラス分けを文Ⅰ、文Ⅱ、理Ⅰ、理Ⅱとしないで「〇〇コース」と具体的な名称にし、外から分かりやすくすべきである。

- ・文Ⅱは国公立のみとし、姉妹校、指定校推薦を受けさせない。
- ・高2から、理系同様に自分に合った教科を選択できるよう配慮する（選択の幅を広くする）。
- ・高2より、私立文系と国公立文系に分ける。
- ・文Ⅰコースについても生徒のニーズ（例…単位制、志望別コース）を考える。

問25 今後の方向についてのその他の意見

（記述）

- ・今在学している生徒をどうするかということに、もっと目を向けなければならない。
- ・中高の一貫性が大切だと思う。中学には国際コース、高校には生命科学コースというのは、奇異な感じがする。
- ・生命科学コースは、高2での文理選択の中の1コースというのが、一番おさまりがよいのではないかな。
- ・他校の様子を詳しく知った上で、検討を進めていくべきではないかな。
- ・生徒の現状を見極めて、より現実的な対応をしていく必要がある。中学にいと、今の大学入試の現状（推薦入試で合格が大半）などがわかりにくい。校内の中・高教員相互の情報交換、共通理解が教育改革の前提として必要である。
- ・基本的には中学入試の受験者を増やして、大事に6年間育てていくことが重要である。
- ・少子化、雇用不安、教育費の増大の中で、わざわざ私立に入学させる人々のニーズは、「公立ではできないこと」「確実な就職への道」という二点に集約される。
- ・生命科学コースを新設するなら、今の清心中の進路学習、性教育、環境教育、校外学習など3年間の諸々の活動の中に系統的に組み込んでいって、生命科学コースを選択する生徒を育てていくようにする必要がある。
- ・生命科学コースの魅力は「特異性」にある。普通科の中に設置して、センター入試を目的にしまえば、公立の後塵を拝するだけで、画期的なもの生まれまいだろう。先陣を切って魅力的であるためには、思い切った価値観の転換が必要である。

まとめ

本校の教育改革のため指針を示すべく組織されたプロジェクト会議（1995年から1997年）の提言から10年が経過した。本アンケートをもとに議論された「理系進学を支援する新しいコース」は、SSH事業で研究課題「生命科学コースの導入から出発する女性の科学分野での活躍を支援できる女子校での教育モデルの構築」を掲げて、生命科学コースとして2006年度から開設した。

参考文献

- 1) 秋山繁治. 清心中学校・清心女子高等学校の展望・アンケート「西暦2000年に清心学園は何を提供できるか」から将来を考える. 清心中学校清心女子高等学校紀要No. 13, p33-117 (1999)
- 2) 秋山繁治. 授業国際情報と本校の情報教育. 清心中学校清心女子高等学校紀要No. 13, p33-117 (1999)
- 3) 秋山繁治. 総合的な学習の授業「生命」で生き方教育・「大切なもの」をどのように伝えるか. 現代性教育研究月報Vol. 23. No. 8, p1-5 (2005)
- 4) 秋山繁治. 30年の性教育の実践（「学級通信」から授業「生命」、女子生徒の理系進学支援）. 関西性教育セミナー10周年記念誌「性について、語る、学ぶ、考える」, p78-81 (2017)
- 5) 秋山繁治. 科学課題研究を中心に据えた女子の理系進学支援教育プログラムの開発. 読売新聞第66回読売教育賞最優秀賞論文集. p3-17 (2018)